日系人ってどんな人…？

辞書で「日系」と調べると、「日本人の系統を引いていること」との記載がある。日系人とは日本から各国へ渡った人とその子孫を指し、移り住んだ最初の人を1世、その子や孫を2世3世と呼ぶ。日本人の海外移住は1868年にハワイから始まり、ブラジルへの移住は1908年から始まった。ブラジルにいる日系人を日系ブラジル人と呼び、令和5年までに約270万人がブラジルへ渡ったとされる(外務省「海外日系人数推計」より)。

「日系」という言葉を分解すると「日本」と「系」と読むことができる。話を聞いた日系3世の方は「系」には「関わる」という意味があり、「日本と関わりを持つ人」と言う意味を込めて『日系人』という言葉を使っていると話していた。

あなたは●●人？

日系人とはどんな認識なのだろうか。自身のことを何人（なにじん）と捉えているのか質問したところ様々な回答があった。ブラジル人、または日本人でもありブラジル人でもある、日本人でもブラジル人でもない日系人...など捉え方は人それぞれ。その中で「自分は自分だ（何人でもない）」と意見した方がいた。ブラジルにいるとジャポネーゼ、日本にいれば外国人と呼ばれる。何人なのかを明確にしようとしている時点でどこかに所属しなければならない、分けようとする心理を感じると話してくれた。

日本人である私にとって、感じたことも考えたこともない発言だった。便宜的に国籍などを分けるが、普段の生活の中で国籍や出身国をもとに分ける必要性はあまり感じられない。あなたは何人...?

ブラジル連邦共和国

言語：ポルトガル語
宗教：キリスト教(約80%)
民族：混血が全体の45%
　　を占める超多民族国家
その他：日本との時差は12時間
　飛行機で26時間のフライト

研 修 報 告

8月にＪＩＣＡ横浜教師海外研修に参加しました。「多文化共生と移民」をテーマに神奈川県と山梨県の小・中・高の教員11名でブラジルへ行ってきました。小中学校や移民資料館の訪問、日系人との交流を通してブラジルの歴史や人々の暮らしを肌で感じ、多文化共生について学びを深めました。

アマゾンで日本語が通じる！！

日本人が最初に移住したのは赤道に近いアマゾンの奥地。ジャングルを開墾して農業を始めた。多くの日本人が移住し、農業組合やジュース工場をつくり、農業の振興に努めた。そんな移住地の1つトメアスーを訪れ、日系移民のお宅を訪問した。移住当時の話を聞いたり、裏庭ならぬ広大なジャングルを案内してもらったりした。1世(70代)、2世(40代)は笑い話ができるくらい日本語が堪能。2世になると生活の中で日本語とポルトガル語が半々くらいになり、3世(高1)になると生活言語はほぼポルトガル語になり、日本語は聞き取れる単語がいくつかある程度。3世は日系学校（日系人が設立した学校）に通っており、日本語を覚えさせたいという両親の思いから日本語学校にも通い日本語の勉強をしていた。食卓には、シュラスコ(ブラジルＢＢＱ)とともにおにぎりや煮物が並ぶ。日本の反対側でなじみの香りと味に出会い、祖父母の家にいるような懐かしい気持ちになった。

農業組合の入り口には、
大きな鳥居が！

週末は兄弟家族で集まり会食を行う。
家族と過ごす時間を楽しむ。

本研修では、
大きな日本人街があるサンパウロ、
アマゾン奥地にあるトメアスー
という街を訪れた。

友だちのことをどう思ってるの？

視察したどの学校でも、自分のルーツを隠したり、恥ずかしがったりせずに自己表現する子どもたちの姿が見られた。公立中学校で、「アフリカ系のルーツがある人は挙手をして」と言うと臆することなく手が挙がる。生徒に「様々なルーツを持つ人がいることをどう捉えているか」と質問すると「友だちとして接するときにはあまり気にしない」という返答。なぜそんなことを聞くの？と不思議がっている様子だった。また「ブラジルを一言で表すと何か」と質問すると「多様性」「多文化」「共同体」という言葉が小中学生から聞かれた。同じ質問を大人にしても同じ答えが返ってきた。ブラジルに暮らす人々にとって様々なルーツやつながりを持った人がいるのは当たり前で、多様な価値観を受け入れて共存していることが日常なのだと感じた。

ブラジルの多様性

研修を通して

外国人だから、あるいは特定の国の出身だからと言ってステレオタイプに基づいた見方をしないように努めたいと思った。ブラジル人にブラジルに関する質問をすると、答えを明言せず「人によりますね」という答えが返ってくる。一括りにすることができない多民族国家の考え方を肌で感じ、日常に多様性があふれていることを知った。自分が職務にあたる中で、目の前にいる一人ひとりの児童を個別に理解しようとする姿勢を大切にしていきたいと思った。

日本とブラジルの両国で生活したことのある日系人と話す中で、どの国の出身（なに人）なのか、両親の母国が子どもにとってどのような存在なのかといった質問は、相手を傷つけたり、混乱させたりする可能性があることを教えてもらった。こちらにとっては何気ない質問かもしれないが、とてもセンシティブな問題が隠れていることを認識した。また、しきたりやルールが異なる国での生活や子育ての苦労も伺った。外国籍保護者に対して問題が起きてから対応するのではなく、事前に持ち物や提出書類などを説明し、理解を促すことが重要であることを再認識した。外国にルーツを持つ児童が多く在籍する本校において、児童一人ひとりのアイデンティティを尊重し、安心して生活できる環境作りを心掛けたい。

［作成者］潮ひかり

食の多様性

量り売りのレストランが数多くある。好きな物を好きなだけ大皿にとるシステムで、寿司もシュラスコもグラタンも1つの皿に集まる。1つの皿の中で異なる料理が混ざり合い、新しい味を発見することも。

一般的なレストランで同じメニューを注文すると、大皿に食事が乗せられて運ばれてくる。ここでも好きな物を食べたい分だけ取り分けて食べる。

植物の多様性

トメアスーというアマゾン地域では、複数の作物を一緒に栽培し、生態系を豊かにする持続可能な農業(アグロフォレストリー)が行われている。同時に複数の作物を栽培することで、病害虫の被害や気候変動の影響を受けにくい。下の写真は、カカオ、クプアス、パッションフルーツの木が植えられている様子だ。視察した農園では上記の他にもバナナ、アサイー、アセロラ、コショウなどが栽培され、収穫したカカオのうち20%を日本に輸出している。

道徳の授業をさせていただきます。

研修で学んだことをもとに11月15日（金）の5校時に4年３組で道徳の授業をさせていただきます。授業後、ＪＩＣＡ職員を交え、国際理解教育の推進やＪＩＣＡの活用などについて話し合う時間を設けます。国際理解教育に関するクラスの現状や困っていること、今後やってみたい取り組みなど意見交換をして頂ける先生は潮までお知らせください。

参考サイト：ブラジル連邦共和国　外務省
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/
ＪＩＣＡ歴史を紡ぐ中南米と日本
https://www.jica.go.jp/Resource/publication/mundi/202010/202010_05.html